

実践セキュリティ設計のための身体知

—格闘技・護身術の思想的再構築—

(準備稿)

成田 浩志

SIP (Security Innovation Project)

要旨 (Abstract)

現代社会のセキュリティ課題は、物理的防衛を超えた包括的な脅威予測と回避、すなわちデエスカレーションの設計を要求する。本稿は、格闘技と護身術の訓練を「戦闘技術の習得」から「セキュリティ設計のための身体知の獲得」へと再定義する。競技系格闘技がもたらす精密な身体制御能力、高速な状況判断力、心理的レジリエンスと、護身術が提供する非対称状況への対応原則および環境利用の思考を詳細に分析。両者を比較・統合する過程で得られる「個人の戦闘能力の限界」に関する体感的理解こそが、過信を排し、可能な限り戦いを回避し、たとえ戦闘が不可避な状況でも被害を最小化する、非加害的な危機管理システムを構築するための基盤となると論じる。本稿は、この思想的枠組みを体系的に提示することで、セキュリティ専門家、武術指導者、リスク管理担当者への実務的示唆を与え、今後の実証的研究および教育カリキュラム開発への道筋を示すことを目的とする。

キーワード セキュリティ設計、危機管理、格闘技、護身術、身体知、戦闘能力の限界、デエスカレーション、非対称脅威

第1章 序論：『戦う技術』から『備える知性』へ

1.1. 研究背景と問題意識

現代社会における個人および組織のセキュリティ確保は、単一の物理的防衛手段では達成し得ない、複雑な課題となっている。この文脈において、格闘技や護身術は伝統的に「自己を守るために戦闘技術」として、すなわち「強くなること」を目的として捉えられてきた (Vigilant Tiger Security, 2023)。しかし、この認識は、ルールなき現実の脅威（複数人、武器使用、不意打ち、地理的制約等）の前では、個人の武力という一点に依存する脆弱性を内包する。

本稿は、この伝統的視点に異を唱え、格闘技・護身術の訓練を「現実の脅威に対する理解精度を高め、実効的なセキュリティ構造を設計するための手段」として再定義する。その核